第44号
（2023年6月10日発行）

発行：中央大学学員会　出版白門会

CONTENTS

（お名前は敬称略）

▽ 2023 年度新年会報告　1

▽新春講演会　中川順一　2
小出版社が考える今後の出版業界

▽白門太陽傳～戦いに挑んだ強者（つわもの）たち～〈4〉　3
「無骨でしなやかなストライド～阿部寛　ザ・ロード～」

▽第 99 回箱根駅伝応援　北村信治　3

▽幹事企画報告　高木浩行　4
▽第 22 回能楽鑑賞会に参加して　4
▽駿河台キャンパスについて　4
▽告知板　4
▽編集後記　4

出版白門会の関連行事予定

①会報発行 6 月 10 日
②街歩き企画　5 月 20 日（土）
⇒第 12 回　浜離宮・芝離宮 2 つ目の大名庭園を地図を片手に歩きます。
※詳細は本会ホームページ、会員メールでご案内。
③第 23 回　出版白門会総会
7 月 28 日（金）
会場：出版クラブ（神保町）　4 階
会費：6,000 円
※後日、出欠確認を兼ねたご案内をお送りいたします。
④ホームカミングデー
秋　茗荷谷キャンパス
⑤「第 23 回能鑑賞会」案内
12 月 9 日（土）12 時開場　13 時開演
会場：国立能楽堂（渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1）
JR 千駄ヶ谷駅より徒歩 5 分
狂言　苞山伏（つとやまぶし）
　　能村　晶人（和　泉流）
能　　葛城（かづらき）　大和舞（やまとまい）
　　井上　裕久（観世流）
※　詳細は HP で決まり次第ご案内いたします。

■行事に関するお問い合わせは、下記メールでご連絡ください。
E-mail:pub.hakumon@gmail.com
なお、上記行事のほか、皆さまの仕事に役立つ企画、あるいは懇親の企画を検討中です。

出版白門会ホームページ QR コード

出版白門

出版界に出版白門の知恵と情熱を！

●基本方針
1. 会員ニーズに応える活動による、会員満足度の向上
2. 中央大学、学員会、他支部との連携強化
3. 会費徴収促進による、財政の健全化

2023 年度新年会報告

1月20日神保町の出版クラブにてリアルでは3年ぶりとなる出版白門会新年会が開催された。前年もリアル新年会を予定したが、新型コロナウイルス感染者急拡大によるまん延防止等重点措置が発令され、直前で中止せざるを得なくなった。その苦い経験から昨秋以降幹事会での慎重な議論を重ね、感染対策を十分に施した上での開催を決定した。昨年末にはまた感染者が増えはじめ参加者が減るのではないかと心配したが、当日には学生含む36名の参加があり盛大に開催することが出来た。

会の冒頭には司会の北村広報委員長から中央大学の箱根駅伝22年ぶりの2位入賞の話があり、参加者一同大いに盛り上がり、同窓の結束を強めた。

その後始まった第一部ではノラ・コミュニケーションズ代表取締役中川様による現在の出版業界と中央大学についての鋭い分析と未来像についてのとても分かりやすい講演に、今後業界で取り組んでいかねばならぬことなどを考える上で大変な刺激を受けた。

第二部の懇親会は竹林会長による挨拶、乾杯でスタートし、皆が感激の再会での思い出話や近況報告に花が咲いた。

初参加者挨拶では、学生6名による1分間スピーチ、昨年4月に中央社に入社された堤結南さんと女性白門会前幹事長であった編集工房球の針谷順子さんの自己紹介があり、さらに十数年ぶり参加のノールの上田真喜子さんからの会の思い出話と近況報告に、それぞれ大きな拍手が送られた。

その後、恒例のビンゴ大会、土屋会計監査の指揮による応援歌斉唱で盛り上がり、最後に森岡副会長による「なぞかけ」を織り込んだ楽しくも見事な中締めでお開きとなった。

お開き後も閉館になるまで、名残惜しく、話も尽きず、多くの人が残り、3年ぶりのリアル開催が出来たことに感無量のものがあった。

小出版社が考える今後の出版業界～ついでに私と中央大学のお話～　中川順一

■卒業し就職し、独立してノラに

昭和58年文学部卒の中川です。出版白門会の講演会は毎回錚々たる方々が登壇されるので、私も楽しみにしていました。そこに講師で呼ばれることになって、大変名誉だと感じる反面、「私で良いのか」と思いました。しかし考えてみると、コロナ禍で講演会は開催できるかどうかわからない状態。いつでもキャンセルできる代打要員としてならということでお引き受けしました。コロナ禍が無事収束すれは打席に立つこともないだろうと思っていましたが、今回、こうして先輩から「出ろ」と命じられました。

30年前にノラ・コミュニケーションズという会社を設立しました。社員は常勤パートを入れても10名ほどの小さな会社です。社名の由来は長くなるので省きます。「大方、野良犬、野良猫あたりだろう」と思われるかもしれませんが、創業の決意と不安の中でつけた社名です。詳しくはホームページを見てください。

仕事は「コミュニケーションに関する一切」ということで、主にガス業界、不動産業界の広告や販売促進、そして中央大学も含めたいくつかの大学の広報やOB会組織のお手伝いをしています。

大学を卒業して出版社に入りました。名だたる出版社をいくつも受験し落ちて、ようやく拾ってもらったのが産報出版という会社。当時すでに廣済堂グループの傘下でしたが、レジャー関連書や実用書出版などではそれなりの実績と規模の会社でした。採用されたけど配属は『プロパン新聞』という業界紙。これは不本意でした。まだインターネットなどはない時代でしたが、すでに企業が業界新聞から情報を得ることは少なくなっていました。しかも扱う業界はプロパンガス。当時の私は、プロパンガスは都市ガスになるまでの過渡的エネルギーで、さらに家庭のガスはやがて電気になって、20年先はなくなってしまうだろうと考えていました。ですから、新聞記者の仕事よりも、広告主である企業の販売促進や消費者向けのPR誌の仕事ばかりをしていました。そちらの方が楽しいし、将来があるからと。そして、その仕事を持って、9年間在籍した会社を辞めて独立したわけです。独立の動機としてはこのほかに、会社の買収、分割、そして倒産や新会社設立など、わずかな期間にいろいろあったことも理由です。

■ガス業界にオール電化販売を勧めた

独立したばかりの頃、ある人に「自分のために商売やったって誰も相手にしてくれ貴方を応援しないよ！」と言われました。なるほど、と思いました。ちょうど独立した頃から社会全体の規制緩和の流れの中で、規制業種だったガス業界も競争が始まり、それによって広告の重要性が高まりましたので、広告や販促の仕事は業界の役に立つと思いました。

競争は業界の中だけでなく、2000年頃になるとオール電化攻勢が激しくなりました。当時のガス業界は「電気は敵だ」というスタンスでした。しかし私は思いました。お客様はガスが欲しくてガスを買っているのではなく、風呂に入りたい。ガス会社はガスを売るのではなく、風呂に入る状態をサービスする会社となるべきだ。そこで当社は、オール電化にも対応する会社づくりをクライアントである複数のガス会社に提案しました。業界の反応はさまざまで、会議や講演での私の主張に激怒する人もいれば、面白いと賛同して具体的に取り組む会社もありました。ガスをやめて全部電気にするわけではありません。ガスだ電気だと売る側の都合で考えず、お客様にとって一番良いエネルギーを提供するということ。一方で「何が何でも電気だ」とやっていた電力会社は、2011年の東日本大震災と原発事故で大変苦戦することになります。

■「出版社になりたい」がAmazonで実現

さて、本論である出版の仕事ですが、当社の出版物は「諏訪書房」のブランドで出しています。その名前から、昔からある出版社のように誤認され、それで得をすることもありますが、本格的に始めたのは2007年からです。当社の書庫がある場所は昔、諏訪町と言いました。そこからとったのですが、もう一つ、大学4年生の時に入社試験を落ちた筑摩書房さんへの憧れもありました。新宿から中央線に乗ると、終点の松本の先あたりは筑摩地方です。その前が諏訪地方。いつか筑摩の手前ぐらいまで行きたいという思いでつけましたが、現状はまだ、中野のあたりです。

学生時代から出版社志望ですから、独立後も出版社を立ち上げたいと思っていました。ですから、独立当初から、大手出版社の下請けで書籍や雑誌の仕事をしていましたし、これは現在も続けています。また、クライアントの創業者の本づくりを手伝ったり、業界向けの書籍などの出版も行いました。けれど、当社は出版社を名乗ることはできませんでした。かつての出版流通においては、「出版社」＝「版元」となるのはとてもハードルが高かったからです。版元というのは、まさに仰ぎ見る存在で、「編プロ」は一段格下という時代が長く続いたと思います。それがAmazonの出現で大きく変わります。Amazonを利用することで、当社のような小出版社でも、全国で本を売ることができるようになったわけです。

ようやく出版社を名乗れるようになりましたが、本は売れない時代になっていました。「出版不況」という言葉は随分前から聞かれますが、出版界は不況ではなく斜陽、衰退産業だと考えるべきだと思います。今やWebなど本以外の情報入手手段はたくさんあります。

コロナ禍の直前に1年間、駒沢女子大学の非常勤講師として出版文化論の授業を持ちました。20名ちょっとの学生でしたが、新学期最初の授業で3人が出版社志望と手を挙げていました。しかし最後の授業では0になっていました。定期採用する大手出版社は無理とあきらめたということもありますが、ある学生は「先生の話で、出版業界の将来はキビシイみたいと分かったから」と言っていました。余計なことを教えたのかもしれません。また、出版社の志望動機の一つが、情報の発信者になれることだとすると、今や、出版社に入らなくてもSNSをはじめいろいろな手段により個人で情報発信ができる時代になりましたから、出版社の魅力が相対的に下がったのだと思います。

■出版を守るために出版以外を行う

では、そのような中で、当社のような小出版社は、今後どのようにしていくのか。自社ビルを持つ出版社の中には不動産事業に熱心なところもあるようですが、当社がこれからアパート経営というわけにもいきません。

本を買って読む人には「情報が欲しい」という人と「本そのものが欲しい」という人がいると思います。大手出版社は、情報企業として本だけでないさまざまなメディアに進出したり、著作権管理などの事業に力を入れています。メディアミックスというのは、今から50年も前にKADOKAWAさんが手がけたことですが、エンターテインメントの発信も情報ビジネスです。しかし、これはやはり大資本、大手出版社の領域のような気がします。

本そのものが好きという人はこれから存在し続けるでしょうし、本でなければ得られない、感じられない情報というのもあるかもしれません。その層に向けて、良い本を創り続けることができる出版社は、これからも存続すると思います。しかし、当社がそこに残れるかというと、ハードルが高く甚だ自信がありません。

Amazonにより個人でも本が比較的簡単に出せるようになりました。小説は売れなくなっているのに、小説の賞の応募は増えていると聞きます。カラオケの普及で、歌は聞くだけでなく自ら歌うものとなったのと同じように、本も読むだけでなく自ら出すという人が増え、今後ますますその傾向が強まると思います。ですから当社は、こうした「自分で本を出したい」という人を手伝う仕事に力を入れたいと考えています。

これまでも自費出版の仕事はやってきました。主に「自分史」を書く人の手伝いです。功成り名を遂げた人だけでなく、多くの人が自分の人生について描き残すべきだと私は思います。後世の人が私たちの時代の人間の考え方を知ろうとした時、その手掛かりが安倍さんや麻生さんの自叙伝だけだったら困る、という考えです。そして、SNSなど新たな情報伝達手段や電子書籍などの技術により、印刷した本以外でも、様々に自らの記録を残せるようになってきましたから、そこに対応し本や印刷という形だけにこだわらず、記録を残したい人を手伝う試みをしています。

もちろん本はなくならないと思いますし、なくしてはならないと思います。そのためにも、これからの出版社は本以外の事業で食える体制を作り、出版という事業を維持していかねばと思っています。当社のクライアントの一つである高知県のガス販売会社の定款には「海運業」と書かれています。かつては土佐の炭を大阪に売っていたのです。しかしエネルギー革命で炭の需要は減り、プロパンガスの販売を始めました。業界では後発で苦労しましたが、ガスを扱うことで会社が維持されました。その会社はガスを売り始めた後も、炭を売り続けました。時代が下った現在、炭を扱う店がほとんどなくなったため、その会社の炭はネット販売で全国にどんどん売れています。燃料としてだけでなく、消臭剤や置物などさまざまな用途で、国産備長炭は高価で売られているそうです。残存者利益ということです。小規模事業者には残存利益を目指して辛抱し勝ち残るというパターンがあります。当社も頑張りたいと思っています。

■中央大学のあるべき姿、強みは何か

もう一つのテーマである中央大学についての話をします。文学部志望の私は、私立の第一志望は早稲田で滑り止めは明治でした。トップクラスとは言えない私立高校だったので、進学クラスの生徒は志望とは関係なくたくさんの学校を受けさせられました。学校の合格実績になるからです。ある日教師から「中央大学も受けろ」と言われましたが、中央と言えば法科ですから、「中央って、文学部あるんですか？」と聞き返しました。命令で受けることになりましたが、多摩移転したばかりの年です。2月の寒い時に多摩の山奥に行って風邪でもひいたら大変だと思っていたら、受験番号が6000番以上なら駿河台で受験できると聞きました。そこで出願を締切りギリギリにして駿河台で試験を受けました。

中央とそのほかいくつかは受かりましたが、国立大学も早稲田も明治も落ちました。親は現役で大学に行かせたかったので、入学金締切が早い国学院に早々に入学金を振り込んでいました。浪人して早稲田を受けさせてくれと頼みましたが、ダメだと。そんな時、教師の一人が父親に電話をかけてきました。「国学院の国文は教師や学者になるならいいところだが、おたくの息子さんは教師にも学者にもならないだろう。一般企業に行くなら、中央の方がつぶしがききます」と。会社員だった父親は学校で苦労したので「お前、中央に行け」と言いました。そんな事情で中央大学に入ったわけです。そうやって入った学校ですが、今は中央に入ったことに感謝し、中央が大好きです。

ただ、入学後、今に至るまで、「中央大学卒です」と言うと必ず「法科ですか」と言われます。あれは嫌ですね。そして法学部出身の先輩方の中には、「中央が一流」と思ってる人が少なくありません。私は「落ちて中央」なので、残念ながら「一流」とは思わない。卑

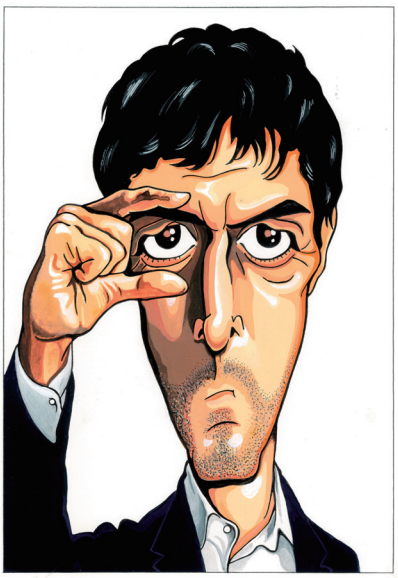
下するわけではないがトップじゃないでしょう、と。私は早稲田や明治に落ちたことを悔しく思っているから、彼らに負けたくないと、これまでも、これからも頑張るわけです。

法学部は中央大学の看板ではありますが、「法学部を都心に移せばいい学生が集まり、それで司法試験合格者を増やせば全体のブランド力が上がる」といった考えには違和感があります。仮に昔に比べて中央大学のブランド力が下がったすれば、それは「司法試験に合格して弁護士になる」ということが昔ほどの価値がなくなったからだと、私は考えています。依然として司法試験は難しく、弁護士は立派な職業ですが、「弁護士になりさえすれば豊かに食っていける」という時代ではなくなっています。社会はそれに気づいているのに、いまだに司法試験合格ばかりに重きを置くとしたら、それはどうなのかなと思います。

中央大学は司法試験や資格試験に強いのが強みだと言われます。世間がそう思うのは結構ですが、卒業生や大学自身がそれを言うのはどうかなとも思います。学生時代それほど勉強したわけではありませんが、大学は学問するところです。どうも文科省あたりはすぐに成果が出る研究や実学にしか金を出さないという感じになっているようですが、文学部出身者としては「学問のための学問で何が悪い」と、大学こそが言うべきではないかとも思います。

『タイムトラベル中大125』に書かれているのを見つけたのですが、1885年9月19日、英吉利法律学校開校式での来賓・福沢諭吉は「（社会における人間の諸活動はすべて）「法理の範囲内にあるものなれば、法律は人間生々必須の学と云うも可なり」とし、「判事となり代言人となるがために法律を学ぶという者は、未だこの学の区域を知らざるの考えたるに過ぎず」と演説したそうです。これは、わが母校を愛する全ての人に知って欲しい「建学の精神」の解説だと思います。

（広報担当：北村）



白門太陽傳

戦いに挑んだ強者たち〈4〉

無骨でしなやかなストライド

～阿部寛　ザ・ロード～

志賀 コージ

1915年のハリウッド映画創生期。その甘いマスクと禁断のエキゾチズムで全米の女性たちを熱狂させた《美男スタア第1号》が、日本人俳優の早川雪洲です。

身長170cmほどだった彼は、撮影シーンによっては踏み台に乗って相手女優との身長差を調整しました。この手法は、今なお「セッシュウする」という業界用語として存在するのです。

1987年の日本の芸能界。雑誌のカリスマモデルから颯爽と俳優デビューした阿部 寛は、そのギリシャ彫刻のような顔立ちと189cmの長躯によって、引く手あまたの大活躍をする・・・はずでした。

その見上げるような恵まれた体が災いして、共演する女優との釣り合いが取れず、次第に仕事は激減します。すでに〝過去の人〟状態となっていた1992年、敬愛する高倉 健が15年ぶりにテレビドラマへ出演という報を聞きました。

「どんな役でも！」と懇願し、ワンシーンのみでセリフはひと言ながら出演を果たすのです。撮影終了後、「いつか共演できたらいいね」と健さんからの温かい言葉と名刺を受け取り、この出来事が今日の阿部 寛を生んだ要因のひとつであったと述懐しています。後年、健さん主演映画のリメイク版のオファーが立て続けに来たのは、まさに奇縁と言えるでしょう。

再びの躍進が始まり、難しい役柄も果敢に演じ、とりわけ世渡り下手のちょっと意固地な二枚目半的男性像は、阿部寛の真骨頂です。その場にとどまることを良しとせず、新たな境地に挑み続ける無骨漢。誇らずおごらず、常に「新参者」としての無垢なその瞳には開拓者としての熱き魂が宿ります。

俳優・阿部 寛の未来には何が待っているのでしょう？　大の格闘技好きである彼の背中に、あの〝燃える闘魂〟の名言が重なります。

「迷わずいけよ、行けばわかるさ!!」

志賀 コージ（しが　こーじ）

1958 年東京生まれ。イラストレーター、エッセイスト。数々の名作映画から人生を学ぶ。心打つ映画に触発され 10 代から描き続けているスタアの 似顔絵はゆうに千枚を超える。近年は名作映画の魅力と共に、あらゆるエンターテイメントの芸術的遺産と感動の数々を、イラストを通して伝えるこ とをライフワークとしている。〔著書〕『映画スタア似顔絵 昭和館 シャイでクールでお熱いのがお好き』、『映画スタア似顔絵 昭和・平成館 続シャイで クールでお熱いのがお好き』（いずれも里文出版刊）ほか。

第 99 回箱根駅伝応援　　北村信治

昨年に引き続き、コロナ禍中での応援は現地（例年であれば復路ゴール付近での応援を行わず、出版白門会としては各自が自宅からの応援という形を取りました。

正月2日の往路1区では、関東学連選抜の新田選手（育英大学）が独走し、中央大学をはじめとする「2位集団」は牽制しながらの区間運びとなりました。1区終盤で2位集団が崩れ、育英大学の新田選手も疲れが出たようで4位で襷を渡しました。

「花の2区」ではエースの吉居大和（兄）選手の力走（同郷の青山学院大学の選手からの一声からのスパート）で1位を奪取。その後3区の中野選手、4区の吉居駿輔（弟）選手との走りを受けた5区の阿部選手の維持の走りで往路2位につけました。

3日の復路では2位スタートで6区若林選手の走りで何とか1位との僅差あるいは、1位になって欲しいと画面越しでありましたが、応援していたOBも多かったのではないでしょうか？

7区の千守選手、8区の中澤選手、9区の湯浅選手と粘りの走りを見せて「2位独走」を維持して最後の10区の助川選手は同期の走れなかった仲間の田井野選手の思いを腕に書き記して「総合2位」でゴールテープを切りました。低迷していた箱根駅伝もここ数年で見違えるようにメンタル面も強く「白門魂」が前面に出た走りが結果を生みました。

来年は記念すべき第100回大会。出場枠も「関東」ではなく「全国」に門戸を広げる大会になります。

今年のこの勢いを胸に箱根路を駆け抜けてください！応援しています。

幹事企画報告　高木浩行

出版白門会の定例行事の候補として、2月11日にプロバスケットボールのＢリーグ公式戦を理事・幹事の有志8人で下見してきました。幹事会書記の立石さんがＢリーグ茨城ロボッツの運営事務局に勤務されている関係で水戸アリーナを訪問。ほとんどの参加者が初めてのプロバスケット観戦に興味津々でした。試合会場では開始1時間以上も前からサウンドが鳴り響き、ライトアップされショーアップ感満載。試合が開始されると選手のバスケットシューズがキュッキュッと鳴り続けるスピード感、スリーポイントシュートの際の観客の静寂と大歓声、ダンクシュートの迫力とまさに大興奮の内容。ちょっとした試合の合間にもチアダンスや観客へのアクションと飽きさせない演出はさすがでした。試合後の懇親会では立石さんのほか中大出身のチーム事務局の方も加わって、バスケットボールの魅力を語り合う宴となりました。行事としての開催は今後の幹事会で検討してまいります。

第 22 回能楽鑑賞会に参加して　丹田公和

2001年から始まり、今では出版白門会の伝統行事となった感がある「能楽鑑賞会」も今回で22回となりました。この企画が継続できた第一の功労者である檜書店の白石紀一さんが体調不良で、今回参加できなかったのは残念でしたが、3年続くコロナ禍の中で、何とか１回も中止することなく恒例行事の襷をつなぐことができたことにホッとしています。

今回の演能曲は、能が「竹雪（たけのゆき）」、狂言が「内沙汰（うちさた）」で、「竹雪」は離婚した父の方に引き取られた月若が継母のいじめにあい、雪の中であまりの寒さに息絶えてしまい、その骸を駆け付けた実母と姉が雪の中から探し出し、その後、悲しみに沈む実母と姉の眼前で奇跡が起こるという話です。この演能曲でユニークだったのは、実母の怒りが、いじめをした継母ではなく、娘を助けなかった父親に向かったことです。解説の小田幸子氏が言うように、離婚、虐待という今日的なテーマで、舞台の上で時空を軽々と超える能が、テーマにおいても毎回多岐にわたり奥深いことに感心させられます。

狂言「内沙汰」も、浮気をしている妻が、後ろめたい思いをするどころか、浮気相手を裏からかばい、夫をいじめるという話で、これまた自立した今風の女性を彷彿とさせるストーリーです。

第一回の能楽鑑賞会の感想を寄せてくださった、当時副会長だった日販の小関さんの記事に「今回お誘いを頂かなかったら一生（能を）知らずに終わったであろう」との謝辞がありました。まだ、未参加な方も、是非振るってご参加ください。

駿河台キャンパスについて

駿河台記念館が閉館して2年の月日が経ち、この4月に記念館跡地が「駿河台キャンパス」として竣工しました。「駿河台校舎」に通われていた先輩方にとっては、久しぶりの「駿河台キャンパス」の響きに目頭が熱くなったことと思います。この建物は「記念館」という機能ではなく、法科大学院・ビジネススクールとしての機能をもつ「キャンパス」となります。建物の上層階には「学員会本部」や学員が利用できる会議室なども併設されます。記念館がなくなった2年間は「学員会仮移転先」の一ツ橋会館を利用して幹事会を開いておりました。今後は場所を「駿河台キャンパス」に移して幹事会を行い、7月の定期総会・1月の新年会なども行えるか確認して開催の検討をいたします。

告知板

■①出版白門会ホームページのご案内
アドレスは http://pub-hakumon.jimdo.com/ です。Google や Yahoo といった検索サイトで「出版白門会」を検索すると上位にヒットしますので、そこからのアクセスも可能です。
②１頁にも掲載しましたが、スマホ / モバイルデバイス（iPad など）にて QR コードを読み取ると、ホームページにアクセスしますので、ご利用ください。
③出版白門会事務局へのご連絡は下記メールアドレスをご利用ください。
E-mail:pub.hakumon@gmail.com です。

■令和５年度会費未納の皆様へ（年会費金額￥5,000）
①同封の振込用紙にて、もしくは下記口座へお振込みをお願いいたします。
郵便振替口座記号番号　00180-8-600659
加入者名　中央大学学員会出版白門会
振込用紙がなくても、直接郵便局の窓口や ATM でも手続きができます。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ゆうちょダイレクト（パソコン、携帯、スマホなど）もご利用いただけます。
②他行（銀行など）からの振込みをされる場合は下記口座をご指定のうえ、手続きして下さい。
ゆうちょ銀行　当座預金
店名（店番）　〇一九（ゼロイチキユウ）
口座番号　0600659
口座名義　チュウオウダイガクガクインカイシュッパンハクモンカイ
出版白門会は皆様の会費のみで運営しております。ご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。

編集後記

コロナ禍と言われた2020年からの丸3年間、学校行事がことごとく潰れた高校生生活を送った息子が無事に高校を卒業しました。自分事に考えると、高校生活での行事が概ね中止は悲しさがこみ上げてきます。長い人生の中でのたった3年間と言われればそれまでですが、青春時代の1頁が失われたように思います。困難を乗り切った後に、何とか大学からのご縁をいただき、大学生生活が始まりました。「親子二代白門」という事は出来ませんでしたが、「親子二代法学部」という形にはなりました。

この4月に法学部は都心回帰が実現し茗荷谷キャンパスが完成。駿河台記念館を発展的に解消して、法科大学院・ビジネススクールが駿河台キャンパスに移転しました。白門も他校に比べ遅まきながら「都心回帰」を実現しました。多摩キャンパスは広大な土地の中に白亜な建物がある壮大なスケール感が自慢の場所です。駿河台キャンパスは、キャンパスというより、「建物１棟」と呼ぶことの方が相応しいかもしれません。

駿河台・後楽園・市ヶ谷・茗荷谷・小石川、この5か所を一体としての「都心キャンパス」として白門の新しい1頁が始まって欲しいものです。（北村）